

小説 神崎美宙

挿絵 わつきるみ

# ミルク 温泉

10  
イチャラブじゃ〜ぶしの

立ち読み版



終章						
第五章	イチャラブにゆくよく合宿	203				
第四章	幼馴染みの告白	151				
第三章	覗きとミルク	102				
第二章	積極的なハーフ娘	059				
第一章	ほろ酔い美女の誘惑	016				
序章		006				

## 登場人物紹介

Characters



おがさわら  
**小笠原エミリ**

アメリカ人の祖母を持つハーフ娘。  
怪我のリハビリがてら温泉部へと  
入部した。



くろかわ ななこ  
**黒川奈々子**

優に誘われて温泉部に入った大人し  
い女の子。読書が好きで、温泉に入  
るときも本を手放さない。



とうどう いおり  
**藤堂伊織**

温泉部の部長を務める優の  
幼馴染み。小さな胸を気にし  
ていて、エミリにからかわれ  
ることも。

あいば ゆずは  
**愛羽柚葉**

温泉部の顧問の女教師。普  
段はおっとりとした優しい性  
格だが、非常に酒癖が悪い。



あまもりすぐる

**雨森 優**

温泉部で唯一の男子生徒。  
巨乳効果の噂がある温泉を  
見つけてくる。

お気楽教師にツッコミを入れる伊織は賛同を求め部員たちに視線を向けた。

「確かに先生の言う通りかも……ミルクが出るのはちよつと困っちゃうけど、温泉はいいし、料理も美味しいし、帰らなくてもいいんじゃない？」

「わたしも、このままでいい……」

「はあ？ 何をのん気なこと言ってるのよ！ お、おっぱい出ちゃったのよ!!」

期待していた答えが返ってこなかったせいで、赤毛少女は早く目を覚ませと言わんばかりに今度は二人に詰め寄る。

「まあまあ、それで伊織の貧乳が大きくなるならいいことじゃない。ミルクが出るほど胸が張ってるってことはバストアップ効果もあるってことでしょ？ だからこのまま温泉をエンジョイしましょうよ」

慌てる伊織の肩をポンポンと叩くエミリ。そして無表情のまま頷く奈々子と、ニコニコと笑顔を浮かべて頷く柚葉。

おかげで幼馴染みはコメカミをヒクつかせながら拳を震わせている。付きあいの長い優にはプチツという音が聞こえた。

「だからアタシは貧乳じゃないって言ってるでしょ——ツ！」

「ねえ、すぐるん……ちよつとこつち来て……」

多数決で温泉に留まることになり、ふてくされてる伊織をみんなでなだめていると不

意にエミリに腕を引つ張られた。

何をしようとしているのかよく分からないが、部屋を出ると引つ張っていた腕に抱きついてくる。

「ちよ、ちよつと……どこに行くんですか？」

「いいから、いいから。少し二人で話がしたいの……」

二の腕には布越しながら柔らかい乳房の感触が押しつけられ、心臓の鼓動が一気に跳ね上がる。魅惑の巨乳がどうしても気になってギクシャクと足を運んでいると、浴衣姿のエミリは金髪をなびかせながら庭の方へと進んでいく。

ちようど露天風呂の裏に位置する山の入り口のような場所で立ち止まった。

「よし、こちら辺でいいかな……」

美少女は周囲を見渡して、何やら満足そうに頷いている。人気がない場所で女の子と二人きりというシチュエーションに胸がドキドキした。

そうこうしているとエミリがこちらに向き直り質問をしてくる。

「ねえ、すぐるんって……先生と付きあってるの？」

「いや……そういうわけじゃないんですけど……」

柚葉のことは元々憧れていたし初体験の相手ということと特別な存在だ。彼女も少年のことを意識していたと告白してくれたが、正式に付きあっているかというそれは違うような気がした。

「そっか、そうなんだ……」

優が首を横に振ると金髪少女はほっとしたような表情を浮かべているが、いつも明るくノリのいい彼女らしくなく歯切れが悪い。

そんなことを聞くためだけにこんな場所まで来たのだろうかと少年が不思議がついていると、エミリはもう一度辺りを見回した。そして胸の前でモジモジと指を絡ませながら、視線を少年から逸らし口を開く。

「わ、私もすぐるんのこと、いいなあって思ってたから……先生とエッチしたって聞いてね、ちよつと妬いちゃったんだー」

見ているこちらが恥ずかしくなるくらい彼女の顔が赤く染まる。その反応が意味するところを察し、優は驚きのあまり目を剥いた。

「えっ……そ、それって……」

少年に見つめられたエミリは俯いたまま無言で頷く。いつもからかわれてばかりだったので、異性として見てくれているなんて思ってもいなかった。

呆然として見ていると、さらに信じられない言葉が彼女の口から飛び出す。

「すぐるんっておっぱいとかミルク好きなんでしょ……？ だったら先生じゃなくて、私のミルク搾って欲しいの……」

「……は、はい!? エ、エミリさんのおっぱいを……」

「私、おっぱいには結構自信があるんだけど、どうかなー……」

金髪娘は浴衣の合わせ衿を少し肌蹴て胸の谷間をアピールしてくる。

普段から必要以上に押しつけられたりしていた日本人離れした巨乳を思春期真っ盛りの少年が意識していなかったはずがない。心の奥では密かに一度でいいからあのおっぱいを好き放題に揉んでみたいと思っていたくらいだ。

「どうって……それは、めちゃくちゃいいと思います……」

生唾を飲み込み素直に頷くと、美少女は嬉しそうに笑顔を浮かべる。

「……触ってみたい？　すぐるんなら、いいよ……」

いつもだったら問答無用で押しつけてくるのに、まるで少年から手を出すのを待っているかのようにエミリは二の腕でギュッと乳房を寄せ上げ迫ってきた。十代とは思えない迫力ある乳房を目の前に優の心臓は高鳴りつ放しである。

「ほ、本当に……いいんですか……?」

大胆に晒された浴衣の胸元から覗く巨乳に視線を釘付けにされながら少年が尋ねると、エミリは綺麗な金髪を揺らして頷いた。

「うん、いいよ……実は今も結構おっぱい張ってるんだ……ほら……」

痺れを切らしたのか美少女は優の手を掴むと、自分の胸へと導く。むにゅつと五指が乳肉に食い込み、手のひらには驚くほど弾力たっぷりの感触が伝わってきた。

「うわっ！　うっ、おぉ……」

柚葉の乳房はとにかく柔らかかったが、エミリの胸は指を跳ね返すほどの瑞々しい張り

があつて同じおっぱいでも全然触り心地が違ふ。

浴衣越しでも若さ溢れる巨乳の心地よさは十分に伝わってきた。

「あ、ンっ……どうしたの？ 好きに揉んでいいのよ……」

金髪少女はくすぐつたそうに身を振りながらも笑顔を浮かべ、自慢のおっぱいをもっと味わつてと言わんばかりに少年の手に自分の手を添えて胸に押しつける。

ぐにやりと形のいい巨乳が歪み、男心を楽しませ興奮を誘う。

(エミリさんのおっぱい……すごい弾力だな……)

乳房を揉む手はいつしか両手になり、優はそのずっしりとした重みのある揉み心地に夢中になっていた。下から持ち上げてみたり、円を描くように揉んでみたり、ぎゅつと左右から押しつけてみたりと、何をしても魅惑のバストは手のひらの中で柔らかく弾む。

鼻息を荒くする年下の少年を嬉しそうに見つめていたエミリだが、ふと何かを思いついたらしく悪戯っぽい表情を浮かべた。

「……ねえ、先生のおっぱいと比べてどっちが気持ちいい？」

「えっ……それは……」

柔らかさと大ききなら柚葉の勝ちだが、肌の張りや弾力ある揉み応えならエミリの方が勝っている。それぞれ特徴があつて、一言でどちらがいいか言いきるのは難しい。

「ン、ふう……先生には負けてないと思うんだけどな。ほら、直接触つてみて……」  
優が言いよんどんでいると、金髪少女は合わせ衿の間から手を差し込ませておっぱいを直



接揉ませてくれる。

浴衣越しに触っていてもかなり気持ちよかったが、生で触れた乳肌は指に吸いつくほどなめらかで揉み心地が全然違った。

「おお……や、柔らかかつ……」

手のひらにずっしりと重みを感じるエミリの乳房のポリュームに、感動のため息を漏らしてしまふ。

反対の手も浴衣の中に忍ばせると合わせ衿は大きく左右に肌蹴て巨乳がぷるんと弾み出してくる。

「あはっ、いいでしょ……私のおっぱい気に入ってもらえたかな？」

「は、はい、すごくいいです……最高ですっ……」

両手で持ち上げるように生乳の感触を味わいながら頷く。

欧米の血が混ざっているためか乳肌は驚くほど白く、柚葉に負けないサイズを誇りながらも綺麗な形を保ったまま重力に逆らい真横に張り出していた。その頂点でツンとした突起とその周りの膨らみは美しいピンク色をしていて男の欲情を刺激する。

「直に触られると、ンンっ……余計に胸がジンジンしちゃうっ……」

後輩の少年を積極的に誘惑していたエミリだが、乳房を揉まれていっうちにだんだんと声か熱を帯びてきた。生乳の揉み心地に興奮した少年の迫力に押され、美少女の足元は揺らめき背中が背後の木にぶつかる。

「あ、ああンっ！ ちょっと、すぐるんっ……そんなに強く揉んだら、はあっ……」  
逃げ場を失ったエミリは金髪を揺らして仰け反るようにして身悶えしていた。

「……き、気持ちいいんですか？」

そんな反応が可愛くてつい夢中になって巨乳を揉み続ける。

すると袖葉の時と同じように徐々に乳房全体が張ってきたような感覚があり、薄ピンク色の乳輪がぷっくりと膨らんできた。そして乳首は芯が入ったかのように硬く尖る。

「う、うん……ちょっと恥ずかしいんだけど、何だか胸が熱いの……」

息を弾ませ大きく上下するエミリのおっぱいが目の前に迫り、心臓の鼓動は一気に大きくなる。近くで見れば見るほどむしゃぶりつきたくなる美味しそうな乳房だった。

「あ、あの……おっぱい、舐めても……いいですか……？」

「ンっ……いいよ、すぐるんの好きにして……」

顔を上げて恐る恐る聞いてみると、金髪娘は嬉しそうに目を細めながら首を縦に振る。そしてすぐに少年の頭を抱き寄せた。

「……うっぷっ！」

柔らかいおっぱいの感触を顔面全体で味わいつつ、まるで自ら舐めてと訴えかけるように自己主張をする乳首にむしゃぶりつく。

「ああン！ あ、ああっ……おっぱいが痺れてっ……」

コリコリとした感触の尖りを舌尖で突っついただけで、エミリは甲高い悲鳴を上げ身体

を震わせた。その反応のよさに男心はますます刺激される。

(うおおお……エミリさんのおっぱいを舐めてるっ!!)

学園でやたらと押しつけられ、いつも意識していた巨乳を両手で揉みながら乳首を舐めしやぶっているのだ。そう思うとつい興奮して手のひらにも力が入る。

「そ、そこは……あんっ！ そんなに舐められたら、変になっちゃうっ……」

鼻にかかったような声を漏らしながら喘ぐ美少女の乳房の張りはいっそう増し、乳肉に食い込む指を力強く押し返してきた。

そんな弾力溢れる瑞々しいおっぱいの揉み心地を堪能しながら思いつきり硬くなった乳首に吸いついた瞬間——突然、口の中に甘い味が広がった。

「ンンっ!? むぐっ……お、おおっ……」

思わず乳房から顔を離すと、乳首からじわつと白いミルクが溢れてくる。

(本当にミルクがっ……しかも甘くて美味しい……)

柚葉の時ほどの衝撃はなかったが、やはり同世代の少女のおっぱいからミルクが出てくるなんて驚かすにはいられなかった。

「あん……ま、またおっぱい出ちゃった……」

色気を増したため息を漏らしながら自分の胸を見下ろすエミリ。話していた通り一度出だすと、ミルクは軽く乳肉を揉んだだけで堰を切ったように次々と溢れてくる。

びゅ、びゅるるっ……びゅっ、びゅるるっ!

握力を込めるとさらに勢いよく甘い香りのする乳液が飛び散り、正面にいる少年の浴衣の胸元を濡らした。ミルクおっぱいに感動していると、不意にエミリが心配そうな表情を浮かべて見つめてくる。

「ね、ねえ……すぐるん、本当に引いてない？」

「……どうしたんですか、突然？」

いつも明るく笑顔を絶やさないハーフ娘はミルクが出るようになって、ノリノリで誘惑してきていたような気がしていたので意外だった。

「いやあ、これじゃあ伊織がいつも言ってるみたいにさ、私のおっぱいって本当に牛みたいだなあって思ってた……ちよつと心配になっちゃった……」

てへつとワザとらしく舌を出して金髪少女は照れ笑いを浮かべる。胸には自信があると書いていたが、さすがに妊娠もしていないのに射乳しているところを見られると変に思われていないか不安になったのだろう。

「全然引いてなんかかないですよ！ エミリさんのデカイおっぱい迫力あってすごくいいですよ！ ミルクだって、エロいし……牛みたいで最高です!!」

そんな不安を払拭しようと正直に巨乳を褒めたつもりだったが、彼女は頬を赤く染めて苦笑いを浮かべている。

「もう、すぐるんだったら……牛みたいで最高って……しかもデカいとかエロいとか、女の子にそんなこと言っちゃダメでしょ……」

「え、あつ……すみません！ 悪気があったわけじゃなくて、本当にいいなって……」

デリカシーのないことを言ってしまったことに気づき、優は頭を下げた。

しかし少年がミルクに引いてないし、自分のおっぱいを気に入っていることを知ったので安心したのか、少女はいつものように明るい笑顔を浮かべ首を横に振る。

「ううん、いいのいいの。すぐるんが気に入ってくれたなら嬉しい……だから私の牛みた  
いなおっぱいをもっと可愛がって……」

そう言いながらエミリは首に回している手に力を入れて再び少年を抱き寄せた。さつき  
まで不安げな顔をしていたのに、すっかり余裕を取り戻している。

「は、はい……それじゃあ……」

ピンク色の先端から溢れるミルクを舐め取るようにおっぱいをしゃぶると、金髪少女は  
嬉しそうにビクビクと身体を震わせた。

「はあんっ……最初おっぱいが出た時はそんなに感じなかったのに、すぐるんに搾られて  
ると……すっごく気持ちいいっ……」

「……そうなんですか？ じゃあ、もつと搾ってあげますね……」

彼女がミルクを搾られて悦んでいることを知り、嬉しくなった優は調子にのって両乳を  
ギユッと揉み搾り、乳首を乳輪ごと口に含んで吸いつく。

「あ、あん！ そんなに先っばばかり、舐められたら……ふうんっ！」

いつもからかわれてばかりだった先輩が自分の愛撫で感じてくれている。そう思っただ



けで興奮で胸が熱くなってしまう。

反対の乳房にも舌を這わせ、溢れるミルクを飲み干していく。

「ちゅっ……エミリさんのミルク美味しいですっ……」

「……ほ、本当？　んはあつ、あんっ……せ、先生のよりも？」

「やけにこだわりますね……どっちも美味しいですよ」

少年が無難な返答をする、何やら先ほどから女教師に対抗意識を抱いているような美少女は切れ長な眉を歪ませ不満げに口を尖らせる。

「えー、さっき私のおっぱい最高って言ってくれたのにつ……エッチしたから先生の方がいいってこと？」

「そ、そういうわけじゃないんですけど……」

もちろんエミリの日本人離れたサイズを誇りながらも美しい形を維持している巨乳は見た目も採み心地も最高だった。

しかし生まれて初めて触っただけあって、大人の魅力溢れる柚葉の乳房に直接採んだ時の感動は今も胸にある。手のひらにはその感触もはつきりと残っている。

それぞれのよさがあつて、どちらが上かなんて甲乙つけるのは難しい。優があれこれ悩んでいると、そんな様子をジッと見つめていた少女が意を決したように口を開いた。

「もっと私のことをすぐるんに知ってもらいたいの……だから、エッチしよ……」

「は、はいいいいッ!」

「ふふ、慌てないでください。優さんが今射精するのはおっぱいの中じゃないですよ」  
「先生……それって、まさか……」

困惑する少年ではなく、奈々子の方を向いて女教師は言葉が続けた。

「優さんのオチ○チンも準備万端ですね。さあ奈々子さん、これからが本番ですよ」

「……え？」

少女は何を言っているのか分からないという風に視線を泳がせている。

「初めてで騎乗位はツライかもしれないという風に視線を泳がせている。はい、優さん、ここに寝てください」

「こ、ここでするんですか……？」

「部屋に戻ったりしたら伊織さんやエミ리さんに邪魔されちゃうかもしれませんよ」

「それはそうですね……」

お昼にエミリと経験しているとは言え、やはり野外でセックスというのは抵抗がある。

しかし柚葉の笑顔には逆らえず、少年は大人しくなるべく平らになっている場所に仰向けに寝転んだ。それでも背中にゴツゴツとした石が当たって違和感がある。

「さあ、奈々子さん、このまま跨ってください。挿入する時は自分のタイミングでいいですからね」

「は、はい……」

返事はしたものの、黒髪少女は天に向かっていきり勃つ逸物を呆然と見つめたまま固ま



っていた。いきなり野外プレイというだけでも敷居が高いのに、他人に見られながらエッチをするなんて普通の女の子なら戸惑うに決まっている。

「どうしたんですか？ もしかしてまだ心の準備ができていないなら、先生が先に優さんとエッチしてもいいですか？」

初めは手伝うと言っていたが、何だかんだ柚葉も優とエッチをしたかったらしい。

「ダメっ……わたしが……する……」

しかし奈々子は美女の言葉を聞くとすぐに首を横に振った。

「そうですか、じゃあ先生は後で……慌てずにゆっくりでいいんですからね」

相変わらずおっとりとした性格というかマイペースな柚葉は、いつものようにニコニコと笑顔を浮かべたまま生徒に場所を譲る。

黒髪少女は意を決したように少年の下半身を跨ぎ、ギンギンにそそり勃つ逸物を見下ろしていた。

「な、奈々子ちゃん、無理しない方が……」

「無理してない……」

心配して声をかけるが奈々子はきっぱりと断言する。

「そうです、そのまま腰を下ろしてみてください」

アダバイスを受けた少女は少し腰を屈めて、恐る恐るといった感じでペニスに手を伸ばし自らの秘所へと向けた。

寸止めを食らい敏感になっていた逸物は温かい指先が触れただけでピクンと震える。

「……っ!! い、痛かった……?」

「大丈夫、奈々子ちゃんの指が気持ちよかつただけだから……」

「そう、なんだ……」

少年の反応のよさに驚いていた奈々子だが気を取り直し、ペニスを握っている手とは反対の手で浴衣をまさぐり、露わになった清潔感のある真っ白なショーツのクロッチを横にずらした。

薄っすらとしか毛の生えていない少女の陰部は淫唇もピタリと閉じたままで、優が今まで見た中で一番幼い印象を受ける。人それぞれ形や色が全然違うんだなと思わず見とれてるうちに、奈々子は逸物をその淫裂へと添えて腰を落としていった。

「あ、ンンっ……ああ……」

少し硬い淫肉と亀頭が触れあい、全身の血流が一気に激しくなる。

「奈々子ちゃん、ゆっくりで……」

「……わ、分かっている……ふうンっ……」

はつきりとは聞いていないが雰囲気から彼女がこういうことに疎い<sup>と</sup>ことはいくら鈍感な優でも察することできた。

緊張しているらしく身体を硬くしたまま、上手く挿入できず腰を必死に揺らめかせている姿を見ていると急に愛おしくなってくる。

「奈々子さん、もう少し腰を前に出してみてください……そう、そのまま……」

「……こう？ あ、あは、ソラソラ……」

言われた通りに腰の位置をずらすと、亀頭が肉の窪みにズブリと沈んだ。

しかし本当に先つちよが軽く入っただけだったのに、奈々子は黒真珠のような瞳を丸くし息を呑んでいる。それでも両脚を踏ん張り必死に腰を落としていくが、狭い膣内の抵抗は想像以上に強かった。

「うう……つつ……あ、あぁ……」

いつも無表情の奈々子の顔が痛みで引きつって、そんな表情を見ていると申し訳ない気持ちでいっぱいになってくる。

「痛い、よね……ごめん……」

「ぜ、全然……痛く、ない……」

少女は目尻に涙を溜めながら必死に首を横に振った。

ウソだつてことくらいすぐ分かったが、それを追求するような野暮なことほしくない。そうしている間もじわじわとペニスは処女肉をかき分け、奥へと進んでいくが肉壁の強い抵抗はそのまま快感になって股間に広がる。

それだけで射精してしまいそうになりながらも腰を押し出していくと、ついに亀頭が何かを突き破り、ブチッと弾けるような感覚が走った。

「あ、あぁっ——」

綺麗な黒髪を振り乱し、大きく奈々子は身体を震わせながら強く目を閉じる。

「だ、大丈夫っ!？」

「……………だ、い……………じょう……………ぶ……………」

もう声を出すのもやっとな感じだったのに、全身を硬直させながらも股間の上に完全に腰を落としてしまった。肉付きの薄いヒップが下半身に密着し、勃起ペニスが根元まで狭い膣肉の中に埋まる。

蜜が多く温かい膣内は相変わらずキュツキュツと異物に絡みつき、まるで射精を促すように蠢き続けていた。

快感のあまりに腰が蕩けそうになる優だったが、奈々子はもうそれだけで大きく肩を上させ息を弾ませている。

(全然大丈夫じゃない、よね……………でも、すごく気持ちいい……………)

彼女のことは気になったが、あまりに膣肉の締めつけが激しいので気を抜くと挿入しているだけで射精してしまいそうになってしまう。

「今は痛いかもしれませんが、じきに慣れてきますからね……………」

挿入したものの動けずにいると、ずっと黙って見ていた女教師がスツと近づいてきた。そして妹を励ます姉のように優しい言葉をかけていたが、なぜか柚葉の両手は黒髪少女の乳房へと伸び十本の指をグニグニと動かして揉みまくっている。

「せ、先生……………ん、んっ……………はあ、あ……………」

処女肉に深々とペニスを咥え込んだ状態で身動きの取れない奈々子は、されるがままに胸を揉まれ熱っぽい吐息を漏らしていた。

「いや、いきなり何してるんですか……」

「何って胸を揉んだ方が少しは痛みが紛れるじゃないですか」

当然とばかりに説明してくれる柚葉。確かに胸への愛撫で破瓜の痛みを和らげることができるかもしれないが、それは自分の役目ではないかと優は心の中で首を傾げる。

「うふふ、それじゃあ……そろそろ先生も可愛がってくださいね……よいしょっと♪」

「わわ！ え、ええっ?! ちょ、ちょっと先生……」

しかも女教師は乳揉みをしながら片脚を上げて少年の顔を跨いだ。肉感的な太股が頭を挟みむっちりとしたヒップに視界を覆われ、鼻先に押しつけられたショーツは愛液のせいか汗のせいかがぐつしよりと濡れている。

こんなに間近で生の女性器を見るのは初めてで、思わず心臓が飛び出るかと思うくらい驚いた。蒸れた大人の女性の淫裂は物欲しそうにヒクつき、少年の視線を誘う。

「ほら、エッチは奈々子さんに譲ったんですから、舐めるくらいしてくれてもいいじゃないですか」

「そんなこと言われても……むぐっ!」

甘酸っぱい匂いを漂わせている肉土手を口元に押しつけ、美女は甘えるように腰を揺らめかせた。年上の女性なのにこういうおねだりがとても可愛く思えるあたり、さすが柚葉

といつたところだろうか。

「……ン、先生……やめて、ください……」

しかしそんな艶声も同性には何の効果もない。膣奥を肉勃起に貫かれ荒い呼吸を繰り返している奈々子は、抗議するように胸に伸びる腕を掴み身体を振っている。

「遠慮しなくても痛みが引くまで、先生がミルクを搾ってあげますよ……」

「そんなこと……いい、いい、です……ンンっ！」

乳揉みから逃げようとするが、この体勢では逃げ場はない。結合を解く気などない黒髪少女は結局好き放題に乳房を揉まれてしまったよー。

「あら、もうこんなにミルクが出てきましたよー」

「……あ、ンう……どうして……こんなに、胸が……熱い……あぁン！」

さすが同性というか感じる部分を熟知しているらしく、柚葉の愛撫を受けた奈々子の口からは抑えきれない声が漏れてくる。しかもおっぱいからはミルクが噴き出し、虹を描くように横たわっている優の身体に降り注ぐ。

(ぐっ、締めつけがすごい……)

ただでさえ狭かった少女の膣内は搾乳の刺激に反応し、食いちぎらんばかりの勢いでさらに逸物を締めつけてきた。それだけでまた射精欲がムクムクと股間の奥から湧き上がり大きくなる。

「もう、優さん……ジッとしてないで、先生も気持ちよくしてください……」

美女の股間に顔を埋めているせいで蒸れた熱気に包まれ、正常に思考が働かない。

「わ、分かりました……」

言われるがままに片手でショーツのクロッチ部分を横にずらし、濃厚な芳香を漂わせる脛口に舌を伸ばす。童貞を卒業したばかりの少年にクンニのテクニクなどなく、半ばやけになって大淫唇を舐めまくった。

しかし淫肉に舌先が触れた瞬間に女教師の下半身は大きく震え、背中が仰け反る。

「はぁんっ……あ、あん、あぁっ……すっごく、上手じゃないですかぁ……」

露天風呂だけあってよく声を通り、辺りに甘ったるい嬌声が響いた。

生徒に順番を譲ったが挿入への期待からか、美女の膣からはトロトロと大量の蜜が溢れてくる。

「あ、あはぁっ！　そ、そこ……弱いですからぁ……あ、あふう、んっ……気持ちよすぎ……か、感じすぎちゃいますっ……」

予想外に反応が好感触だったため、滴る愛液を舐め取るように舌を動かし続けた。すると柚葉は脂がのった太股でがっちり頭を挟み込み喘いでいる。年上の女性を自分が感じさせているという感覚が男心をくすぐった。

「先生……も、もう……痛く、ない……」

そんなに簡単に破瓜の痛みが癒えるのか疑問だったが、美人教師に少年を取られたと嫉妬しているのか、奈々子が息も絶え絶えになりながら平気だと訴える。

「あ、あん……でもまだ動けないですよ……無理しなくても大丈夫ですよ……」

「……はあ、ソッ……無理、してない……」

ついさつきまでまったく動けない状態だったのに、少女は両脚で踏ん張り、必死に腰を上下に揺らし始めた。

ズツ、ズチャ、ズリュ……ズリュリュ、ズチャッ！

狭い膣肉がゆつくりと逸物を吐き出し、また呑み込んでいく。肉ヒダは少なめだが狭くて窮屈な膣壁とペニスが激しく擦れあい、強烈な快感が股間を襲った。

「はう、うぐっ……う、ああっ……」

意識は強制的に下半身へと向けられ、油断したら今にも射精してしまいそうになる。

「あ、あっ……ん、優くん……どう、かな……はあ、ああっ……」

「気持ちいいよっ……すごくいいっ……」

ぎこちない動きながら何とか腰を揺らめかせる奈々子の健気な姿が胸を熱くさせ、クンを中断して素直に頷いてみせた。

優が感じているのが嬉しかったのか黒髪少女は頬を赤らめ、熱っぽいため息をつく。

黒く長い髪が揺れ、健康的に発育した乳房が美女の手の中で揉み潰されミルクを噴いている。その姿が普段の物静かな雰囲気と違い、確かに異性を感じさせ、少年の興奮をさらにかき立てた。

「もー、優さーん……お口は先生の相手をしてください……」



柚葉は切なげにヒップを震わせ、口愛撫の再開をおねだりしてくる。処女喪失したばかりでまだ硬さの残る奈々子の膣とは違い、熟れた果実のように柔らかい美女の膣肉からヨダレのように愛液が溢れていた。

（うわあ……先生、グショ濡れになってる……）

再び女教師の膣に吸いつきワレメをなぞるように舌を這わせると、待ちわびていたと言わんばかりに淫肉が震え、ドロリと大粒の愛液を滴らせた。

「ああくん、はあっ……そ、そこですっ！ ああ、いいですっ……」

色っぽい声を上げて喘ぐ美女は少年の拙い舌だけでは物足りなくなつたのか、さらに愛撫をねだるように股間を押しつけ片手で自ら乳房も揉みしだき始めた。

たちまち自慢の爆乳からはミルクが迸り、生徒たちの浴衣を濡らしていく。

「あ、んっ……お腹が……あ、熱い……あうん、いい……んあっ……」

少年の興味を惹きたいらしく何とか腰を振り続ける奈々子。柚葉の腰使いと比べると完全に大人と子供だ。しかし十代の若く瑞々しく狭い膣肉にペニスを扱かれるだけで、セックス初心者のは優は簡単に絶頂へと上りつめていった。

（ううっ……奈々子ちゃんの中キツすぎるし、先生のアソコ舐めてたら頭がボーっとしてきて……もう我慢できないっ……）

射精を意識し始めると無意識のうちに腰が動き出していた。

「ひゃあん！ お、奥に……優くんが……当たってるっ……」

下から突き上げられた少女の身体が大きく跳ね、いつもなら絶対に聞けないような甲高い悲鳴を上げ、膣内の締めつけが強くなる。

自分から動くとき粘膜同士はさらに激しく擦れて射精欲が込み上げ、優しくしなければと脳の片隅で理性が待ったをかけようとするが、もつと快感を貪ろうとする本能は止められなかった。

「あ、あぁっ……なかなか上手じゃないですか……ン、ウンっ……その調子で、もつと先生も……あ、はぁんっ……」

奈々子に挿入しながら柚葉にクンニで二人とも気持ちよくさせようなんて、優にはハードルが高すぎる。とにかく夢中で膣穴を舐め回しているだけだが、美女は甘い嬌声を上げながら豊満な肢体をうねらせていた。

（あぁ、出そうっ……もう出そうっ！）

もう勝手に腰が動いてしまう。限界寸前のペニスがつるつるとした膣肉と摩擦を繰り返して、腰が抜けるかと思うほどの快感が全身を駆け巡る。

「はふ、う、んっ……優くん……奥で、また……大きく……あ、あぁっ！」

「きゃふ！ あ、あぁん！ す、優さんの舌が、はぁん……気持ちよすぎてえ……先生、おっぱいもイっちゃいますっ!!」

身体の上に跨る二人があられもない喘ぎ声を上げた。

視界をふさがれているせいで直接見ることはできないが、舌先とペニスで彼女たちの膣



が小刻みに痙攣を起し始めたのは分かる。きっと髪を振り乱し、快感に悶えているに違いない。

「うああっ！ もう出るっ！」

思いつきり腰を突き上げた瞬間に意識が遠のくような絶頂感に襲われる。

「ああっ……胸も熱くて、わたし……ひいあ、あああっ……」

「先生もイクっ！ ああん、おっぱいが出ちゃいますっ！っ！」

奈々子と柚葉の声が重なり、股間の奥で燻っていた欲望の塊が尿道を押し広げながら駆け上がった。

ドビュ！ ドビュビュ！ ドビュドビュッ！ ビュルルル……ッ！！

深々と処女肉を貫いた逸物の先端は子宮口に達し、無遠慮に精液を打ちつける。

「あ、熱いっ！ お腹の奥が……熱いっ……ンはあああっ……」

「はひい、ンっ……優さんの舌が、気持ちよすぎてえ……あ、ああん！」

おっぱいから派手にミルクを飛ばしている二人も同時に絶頂に達したらしい。柚葉は膣から潮まで噴き出し、少年の口元から喉までびしょ濡れになっていた。

「はあ……ああ……すごい……たくさん、中で……出てる……」

騎乗位で中出ししてしまったため、精液が逆流して結合部から溢れてくる。

しばらくこのまま全員で絶頂の余韻に浸っていた。

「……大丈夫？ まだ痛い？」

結合を解き、股間の上から降りた少女は静かに首を横に振る。

「もう、痛くは……ない……けど、変な感じ……」

初体験を終えたばかりだと膣の中に何か入ってるような感覚が残ると聞いたことがあるが、それかもしれない。

「……でも、嬉しかった……」

何より普段は感情を表に出さない奈々子が地面にへたり込みながら顔を真っ赤にして上目遣いに見つめてくるのだ。自分だけが知っている一面というか、彼女とセックスをしたんだという実感がじわじわと胸を熱くさせる。

「それじゃあ、次は先生の番ですね」

二人の間に漂う甘酸っぱい空気の中に柚葉が割って入ってきた。

「え、今したばかりですし……」

「それは奈々子さんとじゃないですか。順番を譲ってあげたんですから、今度は先生とエッチしてください」

女教師は自慢の爆乳を押しつけるように腕に抱きついてくる。

「ダメ……もつと、わたしの……胸を触って……」

しかも反対の腕を奈々子に引っ張られた。あの大人しい黒髪少女まで、まさかのおねだりをしてきて、まさに両手に花といった状態だ。

やけに大きく高鳴る胸の鼓動を感じながら、エラの張った亀頭を膣口に押し当てる。

「ひいあん！ す、優のが……あ、当たってるっ……」

熱く濡れた粘膜に触れた瞬間に彼女の身体が波打った。

「はい、挿入れますよ……でも痛かったら、言ってくださいね……」

「う、うん……」

不安げに見つめてくる少女の腰を片手で掴んで、反対の手で逸物を持ち、入り口を探る。今までは袖葉など女性に主導権を取られることが多くて、考えてみればこの体勢で挿入するのは初めてだった。

少し手間取ったが、肉棒の矛先はずぶっと少し奥へと沈んだ。

「あぁっ……は、挿入ってくるっ……や、優しく！ 優しくお願いっ……」

とにかくできるだけ彼女に負担をかけまいとゆっくり腰を前へと突き出していく。

じわじわと勃起ペニス奥へと進んでいくが、膣内は狭く今まで味わった中で一番の締めつけが襲う。

「う、ううっ……伊織さんの中……すごくキツイです……」

少し硬さも感じる膣肉内は愛液がたつぷりと分泌されていた。それでも処女肉の抵抗は強く、侵入物を押し返そうとするかのように強くしゃぶりつき、肉棒が蕩けてしまいそうな感覚に陥るほどの快感を味わう。

「ひうっ、あぁっ……も、もう、全部挿入った？ いっ、はぁあんっ……」

「もう少しです……痛いですよね？ 少し、休憩しますか……？」

連なる肉壁をかき分けペニスを押し込んでいくにつれて、幼馴染みの表情も緊張で強張っていくので、心配になって腰の動きを止めた。

しかし少女は目尻に涙を浮かべながらも首を横に振る。

「いい、このまま続けて……ぜ、全然痛くなんてないんだから……」

こんな時まで意地を張らなくても思ってたが、伊織らしいと言えばそうだ。何だか心に温かいものを感じながら言われた通り、挿入を再開する。

やがて亀頭は行き止まりのような箇所に行き当たった。彼女の処女の証だ。

一度深呼吸をしてから一気に貫く。

「あ>NNンつ、ンはあつ……ひいいいっ！」

破瓜の瞬間——伊織はギュッと目をつぶり、唇を噛み締めた。目尻に溜まっていた雫がツツつと流れ落ちる。

「くっ……全部、挿入りましたよ？ だ、大丈夫ですか？」

ついに温かく濡れた腔肉にペニスは根元まで包み込まれ、それだけで射精してしまいうなほどの快感が下半身に広がっていく。

「だ、大丈夫……これで、優と一つになれた……ずっとこうしたかったんだから……」

泣き顔のまま必死に笑顔を浮かべる幼馴染みの真っ直ぐな言葉が胸を熱く痺れさせる。

肉体的な繋がりだけでなく、精神的な部分で彼女と深いところで一つになっているよう

な不思議な心地よさが全身を満たしていく。

「僕もこうしたかったですつ……伊織さんとエッチできて嬉しいですつ……」

「本当？　はあん、ンッ、アタシも嬉しい……」

少女の身体は強張ったままなのに、必死に笑顔を浮かべている。

今すぐにも胸の内でたぎる情欲のままに腰を振って少女の身体を味わいたくなるが、かすかに残る理性が待ったをかける。口では平気だと言っているが、破瓜の痛みだつてまだ癒えていないはずだ。

「伊織さんも気持ちいい……わけないですよね……まだ痛いですか？」

「はあんつ、さつきよりはマシになったけど……ン、はあ……気持ちいいとかは、分からない……」

力なく首を振る少女の顔を見ていたら、何だか猛烈に愛しさが込み上げてくる。

「僕は、めちゃくちゃ気持ちいいですつ……だから伊織さんも一緒に気持ちよくなって欲しいですつ……」

少しでも破瓜の痛みを和らげようと、露わになっているおっぱいに手を伸ばした。

「やあんつ、今は……おっぱい、触っちゃダメえつ……」

なだらかな乳房に十指を食い込ませた瞬間に幼馴染みは耳が蕩けるかと思うくらい甘つたるい声で喘いだ。これが本当にあのいつもツンツンしている伊織なのだろうか。

必死に少年の浴衣の袖を握り締め、潤んだ瞳で上目遣いに見つめてくる姿は完全に年頃



の乙女そのものだった。

「ミルク……出てきましたよ……」

先ほどあれだけ搾ったのに、軽く揉んで刺激しただけで小さくツンと尖った乳首には白いミルクが滲んでくる。ペロツと舌で舐め取ると、少女は華奢な身体を振って悶えた。

「あ、ああんっ……あんっ……そ、それは優が、揉むからでしょうっ……」

ほんのりと甘くサラサラとしていて飲みやすいミルクが喉を通過する。伊織のミルクを飲んでみると、身体の奥から火照ってくるような感覚に陥った。

「伊織さんのミルク美味しいですっ……いくらでも飲めますっ！」

「……いいん、はあっ……恥ずかしいこと、言わなくて……いいのよっ……ああん、おっぱいがジンジンって痺れてっ……頭が変になっちゃうううっ……!!」

左右の乳房を交互に舐めていくが、ミルクは次から次に溢れてくる。小ぶりながらとても柔らかいおっぱいの感触と、搾乳されて身悶えしている伊織の姿が可愛すぎて興奮を抑えることができなかつた。

（くうっ……もうジツとしてられないっ……）

少女のことを気遣いつつも、処女肉を味わいたいという欲望は自制できないほど膨れ上がっている。ミルクだけでは満足できない。

「ゆっくり、動きますねっ……」

挿入した時よりさらに優しく、じわじわと腰を引いていった。

「あ、あぁっ！ 抜けちゃうっ……はぁぁんっ！ な、何これえっ……お腹が、めくれちゃうそうっ……」

未知の感覚に戸惑っているのか伊織は不安げな表情を浮かべ、少年の腕を掴んでいた両手を首へと回し、身体を密着させようとしてくる。

「ごめん、伊織さんが可愛すぎて、もう我慢できませんっ……」

こちらからも少女の身体を抱き寄せ、熱を帯びた吐息を漏らしていた唇に自分の唇を重ねた。

顔を近づけると髪の毛なのか彼女自身の匂いなのか甘い香りがぐつと強くなる。どうして女の子はこんなにもいい匂いにするのだろうか。

「あはぁっ……ンンッ!! ちゅ、ちゅうううう……す、優う……ちゅ、ちゅっ」

勢い余って舌までねじ込んでしまったのに、伊織は少し驚いていたがすぐに唾液で濡れた舌を絡ませベロチューを受け入れてくれる。それどころか少しでも身体の密着を増やそうとするかのように、積極的に差し込んだ舌に吸いついてきた。

(あぁ、伊織さんの舌がっ……柔らかくて、めちやくちや気持ちいいっ……)

無意識のうちに腰はゆっくりと律動を刻み始め、限界まで勃起したペニス処女肉をえぐる。その衝撃で少女の背中が弓なりに仰け反った。

「はぁん！ ンちゅうっ……あ、あぁっ、奥に当たってるう……ンンうツツツ!!」

貫いた時より少しほぐれたような気がするが、相変わらず狭い膈壁は容赦なく逸物を締

めつけてくる。凹凸の少ない膻肉と股間の逸物が擦れる度に、ちよつとでも気を抜けば今すぐにも射精してしまいそうなほどの快感が股間に流れ込んできた。

「伊織さんの中、キツくて……すごい気持ちいいですっ……」

「……そ、そうなの？ ふう、ふうっ……アタシは……優が、いいなら、嬉しい……」  
健気に笑顔を浮かべ、鼻先をくつつけるようにキスをねだってくる伊織。

今気づいたが挿入してから何やら幼馴染みがやけに素直なのだ。初体験の衝撃で強がっている余裕がないのか分からないが、気持ちいをストレートに言葉にしてくれるので嬉しい。優も甘えてくる彼女に応えるように華奢な身体をさらに強く抱きしめる。腕の中に感じる彼女の体温が心地よくて、溢れるミルクで浴衣の胸元が濡れるのも気にならない。

ズツチャ！ ズツチャ！ ズチャ、ズチャッ！ ズリユリユツ！！

処女肉の中は蜜で溢れペニスに絡みつき、腰の動きはどんどんと速くなっていく。

「あ、ひあんっ……は、激しいっ……お腹にズンズン響いてるのっ……」

それでもキスのおかげが強張っていた少女の表情も柔らかく蕩け、頬も上気し、唇からこぼれる吐息も色気を帯びていた。

その美少女の喘ぎ声が牡の興奮をさらに煽り、射精欲をかき立てる。

「はあ、ああっ……い、伊織さんっ、僕っ……もうイきそうですっ……」

「んんっ、ちゅむっ……いいわよっ……優の好きな時に、出してえっ……」

限界が近いことを訴えると伊織はとろんとした瞳をこちらに向けながら頷いてくれた。

そんな可愛い表情を見せられると理性なんて完全に吹き飛んでしまい、股間の奥から再び大きな欲情のうねりが湧き上がってくる。

「ひあんっ！ あん、ああん！ すごい、頭が変になっちゃうっ……」

自然と腰使いは荒くなり、快楽の階段を駆け足で上りつめていく。

幼馴染みも気持ちよくなって欲しい。少しでも自分が味わっている極上の快感を共有したい。そう思ったらいつの間にかおっぱいを鷲掴みにしていた。

「ひゃううううんっ！ ダ、ダメよっ……今、おっぱい触ったら……ひいあつ、先っぽばかり弄らないでよおっ……きやう、ふあああッ!!」

甘ったるい嬌声を上げる口をキスでふさぎ、人差し指と親指で硬くなった乳首を摘みながら残りの指と手のひらで乳肉の揉みまくる。

もちろんその間も膣奥を勃起ペニスでズンズンと突き上げた。

「んちゅうううう……ちゅばっ、はあ、あんっ……優う、へ、変なのっ……アタシ、頭がボーっとしちゃって……な、何かきちゃうっ!!」

「本当ですかっ!? じゃあ、一緒にっ……一緒にイきましょう!」

覆いかぶさられて処女肉を貫かれた美少女が甲高い悲鳴を上げる。彼女も絶頂が目の前に迫ってきているに違いない。

「わ、分かんないっ！ けど、はあつ……ああ、き、気持ちいいっ……優にギュッてされて、キスされると、気持ちいいのおっ!!」

ピストンのリズムに合わせてゆらゆらと揺れていた細い脚がいつの間にか腰に回る。

「くうっ、このままじゃ、中に出ちゃいますよっ……」

「あ、ひいんっ……い、いいわよ……アタシの中に出してっ！ ああん、もうダメっ……アタシ、おかしくなっちゃうっ！ 変になっちゃうのおっ……」

ただでさえキツく逸物を締めつけていた膣肉が激しく収縮し始めた。それでもなお摩擦を繰り返す粘膜同士は溶けて一つになるかと思うほど一体感があつて、全身が快感に支配される。

もう何も考えることができなくなり、ただ夢中で腰を振った。もう絶頂を止めることはできない。

「あぐああつ!! もうダメだっ……イクっ！ 出るうううっ!!」

思いつきり勃起ペニスを外女肉に突き立てた瞬間、視界が白く弾けた。

ドビュビュツ！ ビュビュツ、ビュビュビュビュツ!! ビュウウウウツ!!

「ひゃああああんっ！ おっぱい出ちゃうううんっ！ ンはあつ、あひい……あ、熱いのが、アタシのお腹の奥に、いっばいいいっばい出てるううううううっ、ひいひいんっ!!」

伊織は乳房からミルクを噴き出し、クロスさせた細い両脚をビクビクと震わせながら嬌声を上げる。

同時に逸物を食いちぎらばかりに締めつける膣肉が激しく蠢き、ぷしゃあああつとおもらしをしたかと思うほど大量の潮を噴いて達していた。

「うああ！ ああっ……すごい、気持ちよすぎるっ……」

好き放題に射精しているつもりが、いつの間にか処女肉に精を搾り取られているような感覚に陥るほど凄まじい快感が股間を貫く。

あまりに気持ちよすぎたせいで、射精を終えると同時に全身の力が抜けてしまい、幼馴染と抱きあったまま脱力して沈んだ。

「はあ、ああ……すぐるう……んう、ちゅっ」

いつもはツリ上がっている目尻も下がりがり、潤んだ瞳でこちらを見つめていた伊織は少年の首に回っていた腕に力を込めて抱きついてくる。

そして熱っぽい吐息を漏らしていたぷりぷりの唇をそっと押しつけてきた。

「んっ、伊織さん……」

「はむう、ちゅ、ちゅうっ……好きい……」

すっかり素直になっている伊織は頬を染めながら何度もキスを求めてくる。

お返しに僕も好きですと伝えると、恥ずかしそうにまぶたを伏せて胸板に顔を埋めてグリグリと擦りつけてきた。あまりにも可愛すぎる。

普段とのギャップがありすぎて驚かされるが、腕の中ではにかんではいるのは間違いなく幼馴染みの少女だ。そしてこんな表情を見せてくれるのは自分にだけ。

若い男女は満たされた表情を浮かべ、互いの温もりを味わう。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**



竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※盗作・転載行為は厳禁です。無断転載は法的責任を負います。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!

**ヴァルキリー**

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

**cranberry**

<http://www.cran-berry.com/>

**mille-feuille**  
ミルフィーユ

<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元  
ドリーム**

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!